小田原俳句協会報

理事会だより（8・14）

一、①秋季俳句大会の取組み状況報告（市長賞・議長賞は市から承認された。兼題投句二一五名七六二句の新記録。選句依頼は八月二十日発信予定で投句数が多いので各十句選に。）二部入賞の賞品・運営については事業部に一任。（事業部）

②大会当日の進行、役割分担案が提示され検討し九月理事会にて更に検討する。（総務部）

二、秋の吟行会10月28日実施の内容を確認。（総務部）

三、梅まつり俳句大会の兼題、スケジュール等九月理事会で検討決定することに。（事業部）

四、十一月記念号の「わたしの一句」用紙配布、小田原市長から記念号へのお祝いのメッセージを戴いた。（広報部）

五、当会最高齢の植松照子様（こよろぎ）が七月十二日ご逝去、享年百二才、ご冥福をお祈りします。（総務部）

六、FMおだわらにて当協会をPRした。（8月17日村場会長）

「俳句おだわら」10句抄（696号より）

芹澤　常子　抄出

夕暮れのいまだ明るき豆御飯　大澤　紀子
解体の始まる家や花は葉に　肥後ちさこ
母の日や一番小さき母の椀　豊田　幸枝
茄子苗やにはか農婦の小半日　田中　幸子
筋書きの立たぬ余生や蝸牛　中村　昌男
アネモネや鐘の音聞きて旧市街　深澤　一華
梅の香の厨に満つる清夜かな　小林　環
板の間のひろびろとある卯波かな　畠　梅乃
指先の弾みだしたる土筆摘み　山田　照子
異国に戦麦秋の道でこぼこす　田畑ヒロ子

山田　照子　抄出

夏帽子目深に肩はむき出しに　星　一義
香水のさまよつてゐる無人駅　伊藤はる子
鳴り止まぬ恋の形見の貝風鈴　内田知江子
そら豆やドーナツ枕に吾子眠る　菅野　英余
蝸牛こりこりほぐす笑いヨガ　峯尾ユキエ
パレットに夏の絵具を絞り出す　小野　菊土
筒っぽの幼時の写真昭和の日　佐宗　欣二
ペットボトル堰に漂ふ麦の秋　大島美恵子
六月の底にふくらむ無の思索　小澤　園子
追伸に本音一行青葉木菟　北村　文江

■7月号（696号）「競詠8句」より4句鑑賞、4句抄出（1）

夏を乗り切る　池田　忠山

つばくろの巣立ち留守電消去する　杉山あけみ

生まれた巣燕が巣立ちをするのに約一か月かかる。幼少時の鑑賞子の経験ではそれまでは気が気ではない。大人になってもそうだ。だからよほど大事なことを除けば、やることを省いて巣燕の一挙手一投足を、見逃さない。かくて、巣立ちを確認すると、ほっとして我に返る。気がつけば身の周りにやり残した瑣事があちらこちらにある。溜った留守電を消すのもそのひとつだ。掲句に大いに共感する所以である。

年うへの妻働かせ夜釣りかな　瀬戸　正洋

夜釣りをしている間も妻は外で働いている、と読んでいいのか。それとも、作者は昼間働かず、妻に働かせ夜釣りを楽しんでいる、と読むのか。いずれにしても一句の鍵は上五の〈年うへ〉。年上の妻とはこんなにもいいものかと指をしゃぶっている読者がひとりいる。

■7月号（696号）「競詠8句」より4句鑑賞、4句抄出（2）

夏のうつろひ　齊藤　桂

花菖蒲いつしか我背正しおり　高橋みどり

花菖蒲の茎はすっと伸びている。花はあやめや杜若に比べてたいていは華やかで大きい。その重たい花を茎は一直線に支えている。その花を見ているうちに作者は自然に背筋を伸ばし正しい姿勢になったという。人は健気に生きる他のものを見ることによって我が身を正す。しかし、人によってはそこを見ずに通り過ぎてしまう。作者の視点に共感する私である。

薫風や港見下ろす風見鶏　出澤　洋子

今回の八句は神戸の旅でまとめられたものと推察する。神戸は六甲山を後ろに控えたおしゃれな港街である。中でも北野異人館あたりは「風見鶏の館」に代表されるエキゾチックな観光名所。そこに薫風が吹きいかにも明るく清々しい。風見鶏が見下ろすという風に自分を風見鶏に転化させているところにこの句の工夫がある。思い出に残る良い旅となったことだろう。

基地の街芝生の外の炎暑かな　高井　幸子

基地の柵内に入ったことはないが、沖縄では、こんな場面が多いのだろう。基地内の芝生は青々として木蔭もふんだんにあろう。対して柵の外側は、乾いた土やアスファルトばかりでギラつく太陽をさえぎるものもない。「となりの芝生」は基地という沖縄にもあるのだ。

写生句と思われるが、置き去りの沖縄の存在を風刺もしている一句。

嬰児の眼花火の映ゆる宝箱　高杉掘三朗

「大花火」「揚花火」ではないので、この花火は手花火または庭花火の場面だろう。嬰児とあるので、三歳位までの赤子と読んだ。それだけでも目に入れても痛くないほど可愛い。まして、手花火の映る眼は、親の宝だ。

蛇足だが、句の内容からみて、「嬰児（えいじ）」は漢語でなく和語で読めるような構成にしたいところ。

一句抄出

夕さりの青田へ山は影落とし　高橋みどり
薫風や港見下ろす風見鶏　出澤　洋子
熊蟬に誹られてゐるずる休み　陌間みどり
夜鴉の一声放つ門涼み　古屋　徳男

熊蟬に誹られてゐるずる休み　陌間みどり

熊蟬は関東ではあまり聞かないが、関西に行くと朝から「シャアシャア」とうるさく鳴いている。その鳴き声に「誹られている」と感じる作者がいる。作者は基本的に真面目な性格なのだろう。「ずる休み」を後ろめたく思う心があるからこそ、蟬に誹られていると感じてしまうのである。この蟬は「油蟬」とか「みんみん」とかでは駄目で「熊蟬」を持ってきたところに作者の上手さを感じた。

川蜻蛉朝光の蘆そよぎけり　古屋　徳男

一読静かな朝の景色が広がる。夏の朝ではあるが川蜻蛉（おはぐろと言った方がわかるか）が飛ぶ川が見えて涼しげである。「朝光」は「あさかげ」と読む。そんな朝日さす川べりに「おはぐろ」が飛び交い、蘆は優しい風になびき、なびいた蘆の葉に止まるお歯黒蜻蛉も見えてくる。蘆の葉も細く、蜻蛉も細い。かそけき命を見つめる作者がそこにいる。

一句抄出

でで虫になってみるのも悪くない　杉山あけみ
年うへの妻働かせ夜釣りかな　瀬戸　正洋
若夏や杖つく友の口軽し　高井　幸子
下校児のけふもしんがり水馬　高杉掘三朗

俳句おだわら（8・19〆切り、到着順）

◆山北（7・24）　由里子報

万緑や風説のこる城の跡　和田恵美子
掬ひとる滝水澄めり痛きほど　星　一義
ニュース読むＡＩの声朝曇　石田加津子
段ボールの「上積み厳禁」雲の峰　竹下由里子

◆香雨・梅ごち（7・27）　忠山報

道行けば足のもつるる極暑かな　肥後ちさこ
酔へばまた「知床旅情」冷奴　関戸わよこ
しばらくは耳に残りし蟬しぐれ　門松　鳳文
晩夏光昭和ひもとく資料館　吉田　百代
ぐつすりと眠る幼子蟬時雨　吉田　康雄
本丸の城も雄松も灼くる中　陌間みどり
暑き日やもの言ひたげな埴輪の目　小澤　純子
涼しさや文様（もんよう）のなき土師（はじ）・須恵器　池田　忠山

◆こよろぎ（7・25）　つとむ報

片蔭のとぎれて長き家路かな　大澤　紀子
油絵の原爆ドーム晩夏光　髙杉掘三朗
あをあをと山河連なる夏料理　植松テル子
鍬ふるふ吾の小さし入道雲　神山つとむ

◆実のり（8・13）　たか志報

兄も居た故郷の山河桐一葉　荒井ちゑ子
桐一葉ゆったり落ちて城下町　岩本ひさみ
再生の被爆大樹や桐一葉　杉本　久子
初秋の前菜鯛のカルパッチョ　木村　幸枝
曲り屋の外井戸深し桐一葉　新井たか志

◆春野（7・26）　きよ志報

海開きとんびも待つてゐるやうな　伊藤はる子
遠花火話す言葉もなき二人　内田知江子
寂しさの残る線香花火かな　尾崎　一夫
利かぬ気は老いてもダリア赤々と　瀬戸　悠
ゆつたりとナイター観ては疲れをり　二見　和江
オープンカーの犬反り出して夏盛ん　ミステウレッタ弘美
言訳を聞く冷房の効かぬ部屋　長谷川きよ志

◆沈丁（8・7）　寶子山報

庭に椅子涼風受けて婆の幸　若村　京子
片手に乗る幸でいいのよかき氷　柳澤ミサ子
裾からげ梅干す僧の修行かな　田中　惠一
梅干すや星ちりばめしごとくあり　河本　純子
忘れてはならぬ怒りに原爆忌　勝木　澄子

秋暑し根府川石の尖りかな　菅野　英余
しゃがみ込み梅干す夫の手の柔し　髙井　幸子
曽我晴や昔ながらに梅を干す　片野　節子
夕立ちや来るぞ来るぞと匂い立つ　峯尾ユキエ
ランナーの記録更新紅芙蓉　清水美代子
調えし梅干す今の息づかい　松下　俊之
お日様と風の好き日や梅を干す　武居裕美子
念力をもちゐて暑さしのぎけり　森田　久江
風と樹がロックを踊る避暑地かな　川瀬　芳子
珈琲と梅干す匂ひ路地の奥　鈴木　陽子
灼く陽射し電線影の招き道　神田　征夫
百日の幸たくはへてさるすべり　寶子山京子

◆みなみ（7・12）　かほる報

朝の虹何かいいことありそうな　豊田　幸枝
日の透けて天狗の小径濃紫陽花　斉藤　静
川遊びしたくなるよなこの暑さ　小瀬村信子
山伏の矢の放たれて滝開き　加藤　健治
紫陽花の続く道行く最乗寺　柳川　紀枝
裏庭に白き風編む半夏生　加藤　富江
自転車に麦藁帽子飛びたがる　川上　靖子
大夕焼け豆腐芯まで染まりたる　市川めぐみ
滝を見て少し私が新しい　加藤かほる

◆青梅（8・6）　幸子報

風鈴の流れが誘ふ風呂上り　大塚　行人
新涼の箒目立つや鐘の音　加藤まり子
日めくりの立秋またる朝かな　久保寺トミ子
心太ころんでつかむ運もあり　田中　幸子

◆小田原鹿火屋（7・18）　久江報

星満つる日々皺増ゆる梅の顔　足立　和子
麻の葉の刺子ふきんや宵涼し　川本　育子
香水にふと人柄をふり返る　髙橋　小糸
向日葵や風を起こして陽の照りぬ　湯浅　義幸
向日葵の宇宙の風と戯れり　近藤　久江

◆おほゐ（8・16）　きよ子報

無人駅背のびして待つ百合の花　石井千代子
甲子園去る立秋の風を背に　小野　菊土
待望のひと雨ありて大根蒔く　香川　花子
融通のきかぬ極暑のふて寝かな　加藤　春江
余生なお行路も険し盆の月　瀬戸とみ子
蜩や儚き声を振り絞り　髙橋みどり
かくれんぼしている様に茗荷の子　中根登美子
ふり返ることも人生盆の月　中村　昌男

語り部は記憶の伝承終戦日　中津川晴江
原爆忌不戦誓いて輝く瞳（め）　廣田　悦子
立秋や地球の自転速まりぬ　原　仁子
一日を生き長らへて酷暑過ぐ　松良　榮美
人生の問いに語りし盆の僧　安池　利枝
山間に鐘の音沁むや原爆忌　二上　光子
ギャグ一つ友へ手向けの墓参かな　横塚　昌平
夕暮れに暑さ居座る奥座敷　石井きよ子

◆鷹（8・4）　十五報

肘つつく合図気付かぬパナマ帽　青木　孝子
子の文字のをどるもよけれ星祭　池田　令子
名の楠の幹をめぐるや涼新た　西賀　久實
海望む肘掛け椅子や夏の月　佐宗　欣二
肘つきて月下美人の香の中に　中田　笑子
膝ついて結ぶ靴紐山開き　山﨑美知子
東雲に柏手打ちし祭かな　石川　州洋
不器用を通せし父や夏薊　庄司　下載
艶増せる黄楊の根付や梅雨の月　瀬戸　りん
ガラス器に銀のスプーン星祭　高橋久美子
灯涼しアルヘイ棒に夜の来て　中山智津子
炎帝に老コンドルの羽展ぐ　齊藤　桂

朝上りの片岸（はけ）のしづくや岩煙草　芹澤　常子
星祭ウッドデッキに椅子二つ　松岡美和子
仕事終へ外す時計や生ビール　深澤　一華
曾我山にしづむ団月（だんげつ）青田風　大島美恵子
急登（きゅうと）行く陰なす崖の岩煙草　加藤　幾代
秋立や演習音の響きたる　高橋千代子
喉渇く日や落縁の空蟬よ　米山　翠
空蟬や自由の空へ旅立ちぬ　來田　新子
子らは身を父は腸（わた）食ふ秋刀魚かな　青山　典仁
捨て猫の野太き声や秋夕焼　大沢　年子
組み立てに挑む子の手や盆提灯　小林　環
観衆に佞武多の灯火うねりけり　澁谷　明子
木に登る朝顔天に登るごと　下平　美子
秋風や尊徳生家古畳　鳥海　壮六
気紛れな山風を待つ端居かな　古屋　德男
草引くや我に被さる雲の影　守屋　まち
ぐいぐいと曳き手の回る佞武多かな　村場　十五

◆草むら（8・20）　重満報

ふるさとやこれが最後の墓参　石井　秀稀
独り身の枕の下を天の川　佃　悦夫
水銀は個体？液体？芋の露　佐々木重満

◆無所属

朝顔の非常階段好きすぎる　小林永以子
山住や雨のあなたの閑古鳥　畠　梅乃
涼しさを撒いて花屋の長ホース　一ノ瀬茂代
白木槿ねぢれほぐれて大輪に　出澤　洋子
秋暑し八十路の髪をばっさりと　岩楯惠津子
河骨黄花人骨黄花と口遊む　大石　雄介
よってたかって糸瓜の花になっていた　大石　和子
いい風がなかなか来ない冷奴　小澤　園子
四捨五入コロッケメンチトマトかな　瀬戸　正洋
旅の宿けふ父の日の暮れにけり　山田　照子
ほうたるの一つは卑弥呼の光り方　田畑ヒロ子
異国語のとびかう工事現場立秋　杉山あけみ
夏の果てテトラポットの白じらし　山本　すみ
子規の忌や地獄草紙の鶏絵　小島ノブヨシ
死の武器を手放さぬまま八月来　大佐田うづき
履くひとのなき白靴の土踏まず　須田　聡子
盆供養しまふも淋ししまはぬも　北村　文江
熊蝉がにいにい蝉となる目覚め　杉崎　せつ

理事会日程　9／11、10／9、11／13
（毎月第2木曜日　けやき15時より）

俳句おだわら鑑賞（令和7年7月号）

山﨑美知子

梅の香の厨に満つる清夜かな　小林　環

一読して小綺麗な台所の景が思われる。我が家にも梅の木が二・三本があり実梅を拵ぐと一気に忙しくなる。梅干用、ジュース用と様々な準備と作業がある。冬の餅搗同様夏の年中行事となっている。その折梅の香りが台所に溢れる。掲句は、諸々の作業を完了しほっとした作者の満足感が、清夜という美しい言葉で締め括られたのだと思う。

無所属会員の皆さまへ

「俳句おだわら」への一句を毎月19日必着でお待ちします。郵便事情を考慮して早めに投函お願いします。（葉書にて）

宛先：250－0042　小田原市荻窪五四九－一七
村場十五（広報部）

加藤かほる

木枯の奥へ遠吠えしたくなる　杉山あけみ

冷たく強い風。時に障害物にぶつかって笛の音のようなおとを立てる。作者もその音を聞き自らの日頃の鬱憤を遠慮なく叫んでみたくなった。犬や狼のように遠吠えが出来たら気持ちが晴れるだろうか。木枯と一体になって。日頃は穏やかで諍い等起こさない自制心を持つが心には熱いものを持っているのだ。

少しユーモアを持って遠吠えしたくなると表現した。共感を持つ句である。

南方に散りし御霊か夜光虫　佐々木重満
下流へと月の堤の歩を返す　佐宗　欣二
日没に何を包んだ酔芙蓉　佐藤　正子
春浅し法衣の朱き通夜の僧　澁谷　明子
ゴリゴリと躍るすりこぎ山椒味噌　清水美代子
豊年や一輪車押す息子の手　下平　美子
天狼や父にシベリア抑留記　庄司　下載
薫風や憲法九条常しえに　杉本　久子
隠れ家のやうな図書館文化の日　須田　聡子
大陸の駅に乗り継ぐ白夜かな　須田　晴美
銀木犀書棚に父の捕虜日誌　関戸わよこ

木村　幸枝

駿馬ならむ脚細長き瓜の馬　佐宗　欣二

盆棚に供えるご先祖様をお迎えに行く胡瓜の馬が駿馬であると。彼の世でお待ちの方々はさぞ喜ばれることでしょう。お迎えは馬で早くお送りは牛で緩くと昔からの言い伝えである。

子供の頃は父の作った野菜で、嫁してからは近所で頂き芋殻の脚の角度を考えながら、最近は既製品で何とも心許無いが仕方ない。

八月はいろいろ想われる月である。

屯田の地へ初赴任リラの花　佐々木重満
捩花や心のままに四才児　佐藤　正子
雪国や埋もるる家に振子の音　澁谷　明子
恋猫やひげの先まで毛づくろい　清水美代子
朝露や天の涙か地の汗か　下平　美子
牧守も馬も眠りぬ天の川　庄司　下載
戦火尚しずかに灯る聖樹かな　杉山あけみ
手の内は見せずオクラの五角形　須田　聡子
隠れ家のやうな図書館文化の日　須田　晴美
古書店の巴里の絵葉書春コート　関戸わよこ
灯火の欲しきところに石蕗の花

寶子山京子

ラッパーの歌詞のぎゅうぎゅう冬浅し　高橋千代子

ラッパーの畳みかけるように繰りだす言葉、抑揚の乏しいリズムにはいまいちついてゆけないのだが、韻を踏む歌詞、一定の刻み、人生を詠うところは俳句の型にも通じるように思う。

十七音の器に、ラップの全体像を「ぎゅうぎゅう」で言い得る。お見事としか言いようがない。その密度に対し「冬浅し」の抜け感が絶妙。俳句を掌中にし、句に遊ぶ作者の息づかいが聞えてくるようだ。

赤えんぴつ青えんぴつの野分かな　瀬戸　正洋
穏やかに会釈好きなり菊の里　瀬戸とみ子
月光をさかのぼりゆくもののあり　瀬戸　悠
葛切や甘へておけばよかつたと　瀬戸　りん
南中のペガサス夫の七年忌　芹澤　常子
母縫いし糸の硬きを解く春夜　髙井　幸子
啓蟄や逐日変はる犬走り　髙杉掘三朗
精霊棚片し六畳間に戻る　髙橋久美子
万緑や土橋もゆらぐ水の面　髙橋　小糸
映像の地球は青し原爆忌　髙橋　正子
葉桜となりて無口の並木かな　髙橋みどり

米山　翠

朝月のふはりと白し冬菜畑　芹澤　常子

朝月の白い光が静かに冬菜畑を包む頃遠くの空には朝日がそっと顔を覗かせる。

月と太陽が一瞬だけ交差するような時、柔らかな光は畑に並ぶ冬菜の葉を金白色に染め、冷たい空気のなかに温もりの予感を忍ばせる。「ふはりと白し」という表現にはそんな光の移ろいと、自然が見せる繊細な呼吸が宿っているよう。寒さの中に命のぬくもりが感じられる句である。

赤えんぴつ青えんぴつの野分かな　瀬戸　正洋
愚痴言わぬ母の生き方福寿草　瀬戸とみ子
綿虫や日暮が眉に下りてくる　瀬戸　悠
口中に散く落雁あたたかし　瀬戸　りん
女正月お茶一杯の長居かな　髙井　幸子
薪割の谺は山へ冬深し　髙杉掘三朗
欲いまだあり薔薇園のばら真つ赤　髙橋久美子
ほつほつと芽吹き奏でる雑木山　髙橋　小糸
ハイウェイの真白き壁やサングラス　髙橋千代子
薔薇赤しわが晩年の夢新た　髙橋　正子
春めきて予定なき日の薄化粧　髙橋みどり

小田原俳句協会報七百号記念

令和七年度小田原秋季俳句大会

第一部

兼　題　「秋の空」「木犀」（いずれも傍題可）
　　未発表作品に限ります。
選　者　協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）
賞　＊小田原市長賞以下三十位まで（記念大会のため従来より入賞者を拡大します）
　　＊選者特選賞（今大会は当協会以外の各地俳句協会役員の方にもお願いします）

第二部　俳句大会

実施日　令和7年10月11日（土）
会　場　おだわら市民交流センター（ＵＭＥＣＯ）
受　付　11時から　投句締切：12時　開会：12時半
整理費　千円（呈飲料菓子）
席　題　秋季雑詠二句　総互選
賞　小田原俳句協会長賞以下出席者全員を表彰。
（主催）小田原俳句協会　（後援）小田原市
　　各地区俳句協会
寿齢者表彰　令和七年一月一日以降七年十二月三十一日までに満年齢で古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、白寿を迎える協会員。投句が条件です。

秋の吟行会のお知らせ

実施日　令和7年10月28日（火）雨天決行
吟行地　松永記念館展示室、記念館周辺の神社仏閣
句会場　松永記念館本館2階
　　小田原市板橋941の1☎0465・22・3635
　　箱根登山線箱根板橋駅から徒歩10分、駐車場あり
　　会場利用時間（11時から）
受　付　11時半から　句会費五百円
句　会　13時から　投句：嘱目3句（締切12時半）5句総互選
＊各自周辺吟行、句会場で食事可。
＊事前申込の必要はありません。お仲間（会員以外も可）をお誘い合わせの上現地にご集合下さい。
　　総務部　問合せ（伊藤　090-9204-9232
　　佐々木　080-1247-8878）

＊七百号記念号への投句のお願い＊

小田原俳句協会報は、今年の十一月号で七百号を迎えます。この間の会員の皆さまのご支援ご協力に御礼申し上げます。つきましては、十一月号を記念号として現会員の「わたしの一句」を掲載致します。
記載要領（全員に配布）によってご提出下さいますようお願いします　提出締切　十月十五日
（広報部）

小田原俳句協会　〒二五〇―〇〇四二　小田原市荻窪五四九―十七　村場　十五方